# ブラジル人児童の
# 受身表現の産出に関する実証的研究
## ―先行研究の検証―

田口　香奈恵

キーワード　*ブラジル人児童、日本人児童、受身表現、産出、筆記テスト*

## 1．研究の目的

日本に在住する外国人児童にとって、日本語の受身表現は理解・産出されにくいものの一つである。東京外国語大学（1998）は、「受身形という新しい動詞の形を作ること、助詞の形が変わることなどかなり複雑な操作が必要だからである（p.63）」とその難しさを指摘している。しかし、外国人児童の自然発話場面において受身表現について言及している研究（伊藤1998、松本2000，2001）では、使用頻度は少ないが受身表現が観察されている。

また、田口（2001）では、「提示された絵カードを見ながら絵の内容についての質問に口頭で答える」という統制条件下で、滞日１～２年のブラジル人児童２名を対象に約１年間の縦断的研究を行った結果、観察・産出されにくいはずの受身表現がいくつか産出され、次のような結果が得られた。

結果①「はたらきかけそのものをうける」表現から習得されやすい。また、遊びで出てくるような日常生活に密着した表現は産出されやすい。逆に「雨に降られる」のような表現は、自発的にもあるいは統制条件下の追い込まれた状況でも産出されにくく、習得されにくいと考えられる表現である。

結果②「おこる」が「おこ＋られる」になるという活用で覚えるのではなく、「おこられる」というセットフレーズで覚える。

本研究では上の２点を検証するために、より多くのブラジル人児童を対象に受身表現の産出を試みた。以下の３点を研究目的とする。

１）受身表現の産出は滞日期間や学年などと関係があるか。松本（2000）の自然発話場面での調査でも来日１年目後半から受身形が少数出現したことが観察されているが、出現の事実だけで、その後どう変化していったか、どんな表現が観察されやすいかなどについては言及されていない。本稿では、より滞日期間の長い子ども達についても明らかにしていく。

2）産出されやすい表現・されにくい表現は、田口（2001）の結果①を支持するかどうか。
3）受身表現は、「おこる」を受身形の「おこ＋られる」に活用させることによって産出されているのではなく、「おこられる」というセットフレーズ（かたまり）として産出されているかどうか。

## 2. 予備調査

自然発話では出にくい受身表現について、データ中に受身表現が出現していないことから「習得されていない」と判断することは危険だと思われる。田口（2001）では、提示された絵の内容についての口頭質問（受身表現の産出を促す質問）に答えられなかった場合、あるルールを決めてヒントや語頭を言って、本当に受身表現ができないのか確かめている。このような援助があってはじめて受身表現の産出が観察されたケースも見られた。このように、ただ単にデータには出現していないだけであって、実際は受身表現が理解できていたり、受身表現を「引き出す」きっかけを与えれば産出できる可能性もあることが考えられる。

この点を踏まえ、指定された語を使って絵に合う文を生成するというelicitation taskを用いた田中（1997，1999，2001）の調査法に従って予備調査を行った。絵を提示して文を作らせる完全記述法では、能動態を用いた文が多く、受身形は出にくいという田中と同様の結果になった。使用する語を指定しておいた場合は、語を提示してある通りに並べたり、指定された語彙を使用しなかったりと、語彙指定形式でも子ども達に受身を用いて文を作らせるのは非常に困難だった。また、子どもに絵の人物の立場から絵の内容を説明させることも、難しかった。

以上から、子どもの場合、受身形を引き出すために絵や語などのヒントを提示し、受身表現が出やすいような条件を与えないと、受身形を産出させるのは困難であることが明らかになった。したがって、以下の調査では、受身形を引き出すためのヒントを最大限提示した筆記による受身表現産出テストを作成し実施した。

## 3. 調査方法　―横断的調査―

### 3. 1　調査対象児

本研究の調査対象児は、小学校２年生～小学校６年生のブラジル人児童55名（２年生14名、３年生５名、４年生８名、５年生13名、６年生15名）と、小学校１年生～小学校３年生の日本人児童283名（１年生95名、２年生96名、３年生92名）で、どちらも岐阜県内の公立小学校に通っている子ども達である。日本人児童も調査対象としたのは、ブラジル人児童らと同じ年齢の子ども達が同じ課題をどれぐらい達成しうるか、それをブラジル人児童と比較するためである。

表１　ブラジル人児童の滞日期間別平均年齢・来日年齢

| | ２年未満 | ２～４年 | ４～６年 | ６年以上 |
|---|---|---|---|---|
| 人数 | 13人 | 15人 | 13人 | 14人 |
| 平均滞日期間 | 1.36年（0.49） | 3.33年（0.52） | 5.19年（0.59） | 7.92年（0.93） |
| 平均年齢 | 10.08才（1.38） | 9.66才（1.67） | 9.69才（1.65） | 8.92才（1.54） |
| 平均来日年齢 | 8.71才（1.43） | 6.33才（1.94） | 4.42才（1.66） | 1.17才（1.20） |
| 平均学年 | 4.85年生（1.16） | 4.26年生（1.75） | 4.15年生（1.46） | 3.42年生（1.55） |

（平均滞日期間、平均年齢、平均来日年齢、平均学年の括弧内は標準偏差）

ブラジル人児童を滞日期間２年ごとに４つのグループに分けた。表１はブラジル人児童の各グループの平均滞日期間と平均年齢、平均来日年齢、平均学年を示している。事後に行なった児童に関するアンケート調査の結果によると、55名中５名（全員滞日６年以上のグループ）が家庭で日本語のみを使っている以外は、滞日期間に関係なく家庭では両親や兄弟姉妹との会話は主にポルトガル語である。したがって、少なくとも会話レベルではポルトガル語を十分習得していると考えられる。日本語を話す場合もあるが「少し」と答えており、それも家族全員ではなく、例えば父とだけのように、決まった人と話す時だけ日本語を使っている。また、各小学校の取り出し授業(注1) 担当教師の話によると、ブラジル人児童は全員平仮名が書けて読める子ども達であり、取り出し授業で日本語指導を受けているが、受身形の作り方や意味、受身を用いることによって動作主の視点が変化することなど「受身」項目について授業中の学習はない、ということであった。

### 3．2　調査材料

調査に使用した受身表現は12の表現である。以下は、調査で使用した表現文である。受身の分類は、寺村（1982）と工藤（1990）に基づいている。

【直接受身：ひと】　・たろう君はお母さん（に）おこられる
・たろう君は犬（に）おいかけられる
・たろう君はドア（に）はさまれる
・よし子さんはたろう君（に）たたかれる
・よし子さんはたろう君（に）つかまえられる
・たろう君はお父さん（に）ほめられる

【直接受身：もの】　・新しい星がはっけんされる
・世界中でコンピューターがつかわれる

【間接受身：持ち主】・たろう君は犬（に）手（を）なめられる
・たろう君は鳥（に）帽子（を）とられる

【間接受身：不利益】・たろう君は犬（に）にげられる
・お母さんは雨（に）ふられる

上の分類のうち［直接受身：もの］に分類される表現は、田口（2001）にはなかった分類であるが新たに加えることにした。それは、［直接受身:もの］に分類される受身表現が教科学習などで用いられているタイプの表現であるためである。また、本調査では、田口（2001）の調査で使用した表現(注2)を修正し、新たに選択し直している(注3)。

表現数を12にしたのは、この調査対象者が小学１年生からであり、年少の子ども達も調査に集中して取り組める限界が12問だと判断したためである。そのため調査に用いた受身表現が制限された。

### 3．3　手続き

まず、子どもは提示された絵を見る。そして、その絵に合うように文を完成させる。動作主を表す助詞を「を」「が」「に」の中から１つ選ぶ。文末は、語幹が提示してあるのでその続きを書く。文末動詞の語頭を示したのは、子どもに産出させる動詞を統一させるためと、子どもが絵を表すための単語を忘れた場合などのヒントになると考えたためである。例の絵の場合だと、「たろうくんはおとうさん（に）ほめられる」が正解となる。他の表現も同じ様に問題が設定してある。ただし、「取られる」「なめられる」では助詞の選択箇所は２カ所、「使われる」「発見される」では助詞の選択はない。

上記の「調査材料」で挙げた12表現に括弧と下線が記してあるが、括弧（　）は助詞の選択部分、下線部は文末の完成部分にあたる。問題の提出順序は、上

記の分類とは関係なくランダムであるが、どの子どもに対しても同じ順序で提示している。

筆記テスト用紙の冒頭には設問を日本語とポルトガル語で併記し、具体例を示した。取り出し授業へやって来た子どもに、随時テスト用紙を与え、各自で取り組んでもらった。用紙を配布した後、やり方を口頭で日本語を使って説明した。制限時間は与えず、最後まで回答できた子どもからテスト用紙を回収した。

例　たろうくんは　おとうさん（を／が／に）ほめ＿＿＿＿＿。

## 4. 結果と考察　―研究目的の検証―

### 4. 1　受身文の産出

「受身文の産出ができた」とは、「助詞の選択、文末の動詞の受身形活用ともに正しい場合」のことを指す。本調査では、受身文以外で文法的に正しい回答もあった（田口2003）。しかし、本調査の目的は受身文産出の有無なので、ここでは受身文が産出されている場合のみについて取り上げる。なお、問題文の提示順序を統一したことによる影響はなかったと考える。これは、後半の問題の受身文産出率が前半に比べ特に高いということはなかったからである。

#### 4. 1. 1　ブラジル人児童

表２は、ブラジル人児童の滞日期間別受身文産出率を表している。これは、滞日期間ごとに、「「受身文の産出ができた」人数÷各滞日期間別の子どもの数」で計算したものである。12のテスト文はブラジル人児童全体での受身文を産出した人数の高い順に並べてある。

分散分析の結果、滞日期間別グループ間に有意な差があった（$F(3, 51)=8.96$, $p<.05$）。最小有意差検定による多重比較の結果、滞日２年未満と滞日２～４年グループの平均値の間に有意な差が認められたが、他のグループ間の有意差は認められなかった。滞日期間２年未満のグループは「ほめられる」と「挟まれる」がそれぞれ一人から産出されているものの、文末の動詞部分を能動態にし

て書いたものがほとんどである（田口2003）。

さらに、滞日年齢だけでなく来日年齢による差もあるのではないかと考え、来日年齢を基準にt検定を行った。その結果、来日年齢６才と７才の平均値間に最も大きい差が認められた（t（46）=3.35，p<.01）。つまり、この結果によると、６才以前に来日した子どものほうが受身表現の産出がより容易であるということになる。なお、家庭で日本語のみを使っている５名の児童について見ると、受身文の産出が特に高いということはなく、目だった特徴はなかった。

表２　ブラジル人児童の滞日期間別受身文産出率　（％）

| 表現 | 分類 | ２年未満<br>＜13名＞ | ２～４年<br>＜15名＞ | ４～６年<br>＜13名＞ | ６年以上<br>＜14名＞ | 全体の<br>産出率 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| おこられる | 直・ひと | 0 | 60（９） | 62（８） | 50（７） | 44 |
| ほめられる | 直・ひと | ８（１） | 53（８） | 46（６） | 64（９） | 44 |
| 挟まれる | 直・ひと | ８（１） | 20（３） | 62（８） | 79（11） | 42 |
| 取られる | 間・持ち主 | 0 | 33（５） | 54（７） | 71（10） | 40 |
| たたかれる | 直・ひと | 0 | 40（６） | 46（６） | 71（10） | 40 |
| 追いかけられる | 直・ひと | 0 | 33（５） | 54（７） | 43（６） | 33 |
| 使われる | 直・もの | 0 | 40（６） | 38（５） | 43（６） | 31 |
| なめられる | 間・持ち主 | 0 | 20（３） | 38（５） | 29（４） | 22 |
| 捕まえられる | 直・ひと | 0 | 27（４） | 31（４） | 29（４） | 22 |
| 逃げられる | 間・不利益 | 0 | 13（２） | 31（４） | 43（６） | 22 |
| 発見される | 直・もの | 0 | 13（２） | 23（３） | 14（２） | 13 |
| 降られる | 間・不利益 | 0 | 13（２） | ７（１） | 0 | 5 |

※（　）内は「受身が産出できた」子どもの人数

以上の結果から、滞日期間２年未満の子どもからは筆記において受身表現は産出されにくいことが明らかになった。滞日期間が長くなるとともに要求されている回答通りに答えることがきるようになる表現が増えてはいるが、「発見される」や「降られる」などの表現は滞日２年以降でも産出の伸びは小さく、６年以上でも出にくい表現であった。

### 4．1．2　日本人児童との比較

ここでは、まず日本人児童の結果を示し、次にブラジル人児童と日本人児童を比較する。

表３は日本人児童の受身文産出率を学年別に表したものである。12のテスト

文は日本人児童全体での受身文を産出した人数の高い順に並べてある。ほとんどの表現で、学年が上がるにつれて産出率も高くなっている。しかし、「降られる」だけは、学年に関係なく産出率が際立って低い結果となった。

表３　日本人児童の学年別受身文産出率　（％）

| 表現 | 分類 | １年生<br>＜95名＞ | ２年生<br>＜96名＞ | ３年生<br>＜92名＞ | 全体の<br>産出率 |
|---|---|---|---|---|---|
| おこられる | 直・ひと | 74 | 88 | 96 | 86 |
| 追いかけられる | 直・ひと | 74 | 88 | 93 | 85 |
| 取られる | 間・持ち主 | 69 | 88 | 86 | 81 |
| ほめられる | 直・ひと | 57 | 88 | 89 | 78 |
| なめられる | 間・持ち主 | 58 | 75 | 85 | 72 |
| たたかれる | 直・ひと | 53 | 74 | 77 | 68 |
| 使われる | 直・もの | 46 | 72 | 84 | 67 |
| 挟まれる | 直・ひと | 54 | 57 | 62 | 58 |
| 捕まえられる | 直・ひと | 45 | 54 | 66 | 55 |
| 逃げられる | 間・不利益 | 41 | 52 | 49 | 47 |
| 発見される | 直・もの | 18 | 28 | 42 | 29 |
| 降られる | 間・不利益 | 9 | 22 | 4 | 5 |

次に、ブラジル人児童と日本人児童を比較する。図１はブラジル人児童（滞日期間別）と日本人児童（学年別）の受身文産出率を表したものである。ブラジル人児童のグループ分けを滞日期間別にしたのは、受身文産出の難易に差をつけている要因が滞日期間にあることが大きかったためである。左からブラジル人児童全体平均の産出率が高い表現順に並べてある。

図１から、全体的に日本人児童の場合は学年があがると共に産出率が増加し、受身表現の産出が容易になっていったことがわかる。また、ブラジル人児童と日本人児童の産出の難易はほぼ類似している。各グループの児童別にそれぞれを産出率（全体）の高い順に表現を並べて比較すると、「おこられる」「ほめられる」「取られる」「たたかれる」「追いかけられる」は上位６位までに、７位以下は「使われる」「捕まえられる」「逃げられる」「発見される」「降られる」というほぼ同じ順序で産出されにくいという結果となっている。

一方、ブラジル人児童と日本人児童とでは、産出の難易に差がある表現がある。「挟まれる」は、ブラジル人児童では産出されやすかったのに対して、日本人児童では産出されにくかった表現である。この表現では、日本人児童全体の

約３割から「挟まる」という自動詞での回答が得られている。「挟まれる」の表現で、ブラジル人児童と日本人児童の間に特に産出の難易差が出たのは、このように回答の違いによるものである。

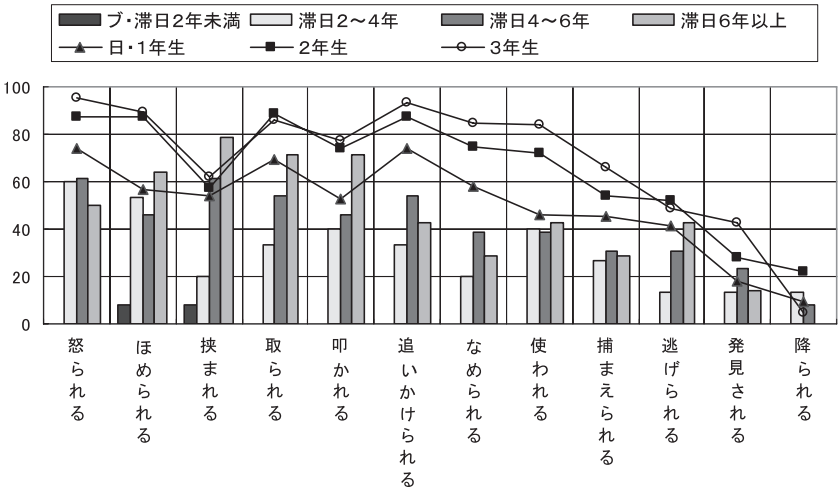


図１　ブラジル人児童（滞日期間別）と日本人児童（学年別）の産出率（%）

### 4．2　産出順序

「4．1．1」の滞日期間別受身文産出率を示した表２から明らかなように、滞日期間６年以上で産出率が50%以上ある表現は、［間接受身:持ち主］に分類される「取られる」以外、［直接受身:ひと］に分類されるものである。それに対して［直接受身：もの］や［間接受身：不利益］に含まれる表現の産出率は低い。このように産出率が高かった表現を寺村（1982）と工藤（1990）の分類から順に並べ替えると、「直接受身：ひと→　間接受身：持ち主　→　直接受身：もの　→　間接受身：不利益］のような順序性があることが示唆される。ただし、「捕まえられる」についてはこの順序性から外れる。この順序性は田口（2001）の結果を大枠で支持している。

ブラジル人児童、日本人児童ともに受身文の産出率が高かった表現「おこられる」「ほめられる」は、学校で先生から子どもに対してことばを用いて頻繁に行われている表現であると考えられる。先生あるいは親のような子どもより立場が上の者（大人）が、それよりも立場が下の子どもに対して向けられる言動である。次に、受身文の産出が高い表現「取られる」や「挟まれる」「たたかれ

る」「追いかけられる」は、遊びやけんか等子ども同士の関わりの中で使われている行動の表現と言えよう。つまり、受身文が産出されやすい表現とは、「大人から子どもに対してなされる言動」、次に「子ども同士の関わりの中でなされる行動」の順で、インプットの多い表現であると考えられる。これは田口（2001）の「日常生活に密着した表現は産出されやすい」という結果と同じである。さらに、これらの表現は子ども自身に「じかに降りかかる経験（田口2001 P.129）」、つまり、行為そのものを受ける表現であるという点と一致している。

一方、「発見される」や「逃げられる」「降られる」はブラジル人児童だけではなく日本人児童での産出率も低い。「発見される」はけんかや遊び場面ではなく教科学習の教科書などに登場する可能性の高い表現である。また、「発見される」の無回答はブラジル人児童全体の約３割である。これは12表現の無回答数の中で最も高い数値である。どのように表現したらよいのか全くわからなかった表現であったとも考えられる。「逃げられる」「降られる」は、子どもがこれらの表現に含まれる被害や迷惑の意識を知らない、あるいは認知的にそのような視点で捉えられないのではないかと考えられる。なぜなら、日本人児童の多くも「犬が逃げたので泣いている」「雨が降って困っている」や「雨が降ったので洗濯できない」と受身文を用いない「他表現」で回答しているためである。また、学校生活をともにしている日本人児童からもそのような理由で出にくい受身表現であるということは、ブラジル人児童が日本人児童との関わりの中でインプットされる機会が少ないため、産出が容易ではないと考えられる。ポルトガル語話者（成人）に同じ絵を見せてポルトガル語で表現してもらったところ、「『逃げられる』、『降られる』は受身形を用いて表現することは機械的にできても非常に不自然である。もし日本語の『逃げられる』と同様に被害を表現したいならば、「逃げたので寂しい」のように能動態で言った後、被害の気持ちを後で付け加える」ということだった。また、ポルトガル語では受身形を用いても迷惑や被害の感情を表すことはできないということである。以上のように「発見される」や「逃げられる」「降られる」が産出されにくかったのは、教科書にしか登場しないような表現であり、かつ非動作主の立場から受身を用いることで被害や迷惑の気持ちをあらわすという認知的な視点が欠けているという理由が考えられる。

### 4．3　受身表現産出の方法

ここでは、目的３）の「受身表現は、「おこる」を受身形の「おこ＋られる」に活用させることによって産出されているのではなく、「おこられる」というセットフレーズ（かたまり）として産出されているかどうか」について考察し

ていきたい。

ブラジル人児童の産出反応の具体的な記述を見ると、受動態にせず能動態で答えるという反応がほとんどで、それ以外には、助詞が正しく選択がされていても文末は無答のもの、全く他の言い方をして文法的に正しい文章を作っているもの①、受身形に活用させる際誤ったもの②、文末の動詞の語幹を無視した反応③や動詞の語幹を用いていても意味の通らない反応④、解答欄に何も書かなかった反応がある（田口2003）。

【ブラジル人児童の産出反応の具体的な記述：例】

①たろう君はお母さん（を）おこらせました

②たろう君はお父さん（*を）*ほめれました

③たろう君はお母さん（に）*おおきなこえで

④よし子さんはたろう君（に）*たたかあた

これらの産出反応から、受身表現をセットフレーズで産出している可能性があると考えられる理由がいくつかある。

一つ目は、受身形に活用させる際誤った、つまり受身形を書こうとして誤ったと思われる反応が5例と他の反応に比べて少ないという点である。もし「おこる」を「おこられる」のように能動態を受動態に活用させているのなら、この種の反応がもっと出現するのではないだろうか。

二つ目に、受身表現の産出率が高かった子ども達は、文末部分を意味の通らない反応や活用での誤り反応を見せておらず、能動態で答えているものがほとんどであるという点である。もしこれらの子ども達が受身表現を一つの文法項目と捉えて産出しているのなら、被動作主を主語にした立場、つまり主語である被動作主に合わせて助詞を選択し、文末を能動態にするという一連の作業が可能ではないかと思われる。

12のテスト文のうち、「受身文の産出ができた」りできなかったりするのは、この場面ではこう表現するというパターンがあって、ある状況がそのパターンに当てはまったとき、その状況に合った受身表現を一つの表現、つまりセットフレーズとして産出している可能性が高いと考えられる。このようなセットフレーズで覚える段階を経て、受身表現を習得していくのではないかと思われる。この点はブラジル人児童、日本人児童に共通しているのではないかと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、ブラジル人児童の受身表現文の産出について、田口（2001）で得られた結果を検証するために、日本人児童との比較を通しながら考察を行った。これらをまとめると、次のようになる。

1）滞日期間２年未満の子どもからは筆記において受身表現は産出されにくいことが明らかになった。滞日期間が長くなるとともに、「受身文が産出できた」と言える表現が増えてはいるが、滞日２年以降でも産出の伸びが小さく、６年以上日本にいても出にくい表現があった。また、ブラジル人児童らと同じ年齢の日本人の子ども達の結果は、学年によって異なっていたが、「はさまる」でも表現できる「挟まれる」以外はブラジル人児童よりも産出率が高く、多くのブラジル人児童は日本人児童のレベルまで追いついていないことがわかった。

2）産出されやすい表現とそうでない表現はブラジル人児童、日本人児童ともに共通している。産出されやすい表現は［直接：ひと］や［間接：持ち主］に分類される。また、「大人から子どもに対する言動」や「子ども同士の関わりを通した行動」で用いられる表現から産出されやすい。

3）受身表現の産出は、「おこる」を受身形の「おこ＋られる」に活用させることによって起こっているのではなく、「おこられる」というセットフレーズ（かたまり）として習得されていることによって起こっている可能性が高い。さらに、場面に応じて受身表現を使っていることが示唆された。

以上、ブラジル人児童の受身表現の産出について課題文完成筆記テストを用いて調査し、その結果を考察してきた。受身表現は回避行動が多く日常生活からではなかなか観察されにくいものであるが、「文完成筆記テスト」を通して出現しやすい表現とそうでない表現があることが明らかになった。これらの結果は、田口（2001）の結果を支持するものとなった。

本稿では受身表現の構造面に焦点を当て調査・分析を行なった。受身表現は日本語のヴォイスに含まれる文法項目であるが、その理解と産出を考えた時、助詞や動詞の活用という構造面だけでなく、視点をどこに置くかというヴォイスの選択の問題も伴ってくる（田中1999、峯2002）。峯（2002）は、視点という立場から「なぜ『能動態』ではなく『受身』でなければならないのかを考えた場合、単文レベルでは説明できない（p.36）」と指摘している。今後は、この点を踏まえ、受身文を使えるようになるとはどういうことか、どうして子どもの受身文産出が能動文に比べ遅れるのか、を追究していきたい。

**謝辞** 本調査に際し、ご協力いただいた岐阜県内の公立小学校（大垣市、可児市、中津川市）の先生方、児童の皆様に心より感謝の意を表したい。

## 注

注１　日本語指導が必要な児童を在籍学級での正規の授業から取り出して、別の教室で日本語などの学習をさせる形態。

注２　田口（2001）で使用した受身表現は10である。このうち【直接受身：ひと】に分類される表現は５つあった。この５つの表現は、子ども達の学校生活に関係がある表現を含んでいるが、表現によって産出されやすいものとそうでないものとがあった。本調査で【直接受身：ひと】に分類される表現が全体の半分あるのは、田口（2001）で使用した表現で子ども達の生活場面に密着した表現でも産出の難易差があったことから、それをもう一度確かめるために、採用したものである。

注３　以下の３点を考慮して本研究の調査文を作成した。①子ども達の学校生活に関連があると思われるもの（産出が容易ではないと予想される表現を含む）。②工藤（1996）の『児童生徒に対する日本語教育のための基礎語彙調査』の中から、出現頻度の高かった（子ども向けの６つの教科書中３種類の教科書に共通して出現）動詞を用いた。③受身文を絵に表した時、不自然でないもの。つまり、文と絵が一致し、受身表現での産出による可能性が考えられるもの。

## 引用文献

伊藤春子（1998）『日系ブラジル人児童へのバイリンガル教育に向けて―教室内における外国人・日本人児童への教師の言語使用―』名古屋外国語大学大学院コミュニケーション研究科国際コミュニケーション専攻修士論文

工藤真由美（1990）「現代日本語の受動文」『ことばの科学』４：47-102　むぎ書房

工藤真由美（1996）『児童生徒に対する日本語教育のための基礎語彙調査』ひつじ書房

田口香奈恵（2001）「ブラジル人児童の受身･使役表現の習得に関する事例研究

―日本人児童･幼児との比較を通して―」『第二言語としての日本語の習得研究』４：116-133　第二言語習得研究会
田口香奈恵（2003）「ブラジル人児童の受身表現の習得に関する実証的研究―産出反応の分析に基づく考察―」『言葉と文化』４：115-128
田中真理（1997）「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』92：107-118
田中真理（1999）『視点・ヴォイスに関する習得研究―学習環境とcontextual variabilityを中心に』平成８- ９年度科学研究費補助金研究成果報告書
田中真理（2001）「日本語の視点・ヴォイスに関する習得研究：英語、韓国語、中国語、インドネシア語・マレー語話者の場合」国際基督教大学大学院比較文化研究科博士論文
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味第１巻』くろしお出版東京外国語大学留学生日本語教育センター編（1998）『外国人児童生徒のための日本語指導第１分冊―カリキュラム・ガイドラインと評価―』ぎょうせい
松本恭子（2000）「［縦断調査研究］ある中国人児童の来日２年間の動詞形態素使用実態―縦断調査結果と日本人児童、及びロシア人児童との比較―」『南山日本語教育』７：115-127　南山大学大学院外国語研究科
松本恭子（2001）「ある中国人児童来日３年間の動詞形態素使用の実態―発話と作文の縦断調査記録：日本人児童や他の外国人児童との比較―」『日本語教育学会春季大会東京女子大学予稿集』.200-206.
峯布由紀（2002）「Processability theoryに基づいた第二言語習得研究」『第二言語習得・教育の研究最前線―あすの日本語教育への道しるべ―』言語文化と日本語教育５月増刊特集号：28-44　日本言語文化学研究会